

友田和秀先生の思い出

吉 田 泰 彦

ドイツ語の友田和秀先生が昨年 11 月に亡くなられた。ここに、ささやかながら友田先生との公私にわたる交際を記して、哀悼と感謝の気持ちを表したいと思う。

私が奈良医大に勤め始めて数年後に、友田さんが赴任された。数少ない語学系教師仲間として、また研究室が隣り合っていたこともあり、30 年ほどの長きに渡って親しくさせていただいた。おそらくは、歳がそれほど違わないことに加えて、文学研究者としてのよしみから、そしてまた、互いに堅苦しい形式張ったことが好みではないことから、終始ざっくばらんな本音のお付き合いであった。振り返ってみて、職場でこのような人間関係が得られたことは、私にとって大変貴重でありがたいことだったと、今しみじみ思う。

かなり早い時期のことだが、一度伏見のご実家（友田さんは当時ここから通っていた）にお邪魔した記憶がある。これまた、気さくなご両親にもお目にかかり、歓待していただいた。勉強の合間に近所を散歩する習慣と聞いていたので、その目あたりを見てみると、町中でありながら緑も残っていて、ちょっと奥まった気配のある場所柄は、気分転換のぶらぶら歩きにはよさそうなところであった。

私と違って、早々に業績を作った友田さんはその名の通り秀才であり、もちろん努力家でもあった。私たちはしよっちゅう大学から最寄りの駅までを裏道を選んでよもやま話をしながら帰ったものだが、ある時私がジェーン・オースティンをやり始めたことを告げた時、友田さんはいかにも腹立たしげに、あるいは、不満げに、吉田さんミルトンで一生遊べるとこないだ言ったじゃないですか、と突っかかってきた。私は学校時代ワーズワス、勤めてから十年ほどでキーツをやり、今ひとつと感じていたので、今度はミルトンにちょっかいを出しかけていたのだった。一生遊べるという私の言葉はもちろん本気であったが、ミルトンはやりかけて半年ほどするとわかったことだが、本式に研究しようとするればギリシャ、ラテン抜きでは無理だろうと結論付けたのである。こち

らが本気だから、相手も本気にしたのは当然であるし、私が腰を落ち着けずにあちこちウロウロするのを気にかけていたに違いない。友田さんが私にぷりぷりする態度をみせたのはこれ一度きりだった。もうひとつ、帰りの道すがら聞いた話である。まだ子どもさんが小さかった頃のこと、帰宅したら彼はふたりの娘さんを風呂に入れて、ビール片手に勉強を見てやるのだという。まさか、そんな子煩悩な男だとは思っていなかったもので、意外な感じがしたことを覚えている。

友田さんには大学のある業務を、体調不良が出るまでのかなりの期間手伝ってもらっていた。喜んでやりたい仕事ではなかったはずだが、今年も一つと依頼して、断られたことはなかった。小さい所帯でやりくりしていた時代のことであり、理解されていたのであろう。ある年のこと、こんなことがあった。その日の仕事を終えて、しまい仕度をしていた時のことである。彼が作業をしていた場所の床の上に、私は五百円玉をひとつ見つけた。尋ねてみると、彼ののだという。そして、これでプチ贅沢ができますと、友田さんは付け加えた。プチ贅沢とは近鉄特急で京都、あるいは丹波橋か、まで行くことであることはすでに聞いていた。特別に疲れている様子も見えなかったので、改めてその理由を聞くと、急行はドアの開け閉めが頻繁で（冬場のこととて）寒さがこたえと言う。そして、その翌年かに体調がすぐれないとの事で、それ以来一緒に仕事をすることは途絶えた。

長い付き合いで記憶に残っているエピソードはこれくらいである。具合を悪くしてからは、（次第に進展していく病状に関して）医者診断はどうであったとか、治療の調子はどうか、友田さんの口からおおよその話は聞いていたので、気がかりは尽きることはなかった。昨年3月に私が退職してからはお会いする機会は格段に少なくなったが、たまにばったり出会うと、やはり順調ではないらしい。そして、大学から訃報が届いたのは11月も末のことであった。

今はただ、友田和秀先生のご冥福を祈るしかない。

2019年1月18日

(元臨床英語准教授)